



表紙掲載の植生・作物カラー写真提供者及び解説文執筆者(*印の解説文は富岡悦郎による)

- ①⑨ = 高畑滋(林業試験場北海道支場)*
- ②④⑩⑪ = 鮫島惇一郎(林業試験場北海道支場)*
- ③ = 富岡悦郎(北海道農業試験場)
- ⑤ = 長谷川春夫(北海道農業試験場)
- ⑥ = 堅木育雄(北海道農業試験場)
- ⑦⑧ = 星忍(北海道農業試験場)
- ⑫ = 斎藤万之助(北海道開発局)*
- ⑬ = 安田修(北海道開発局)*
- ⑭ = 古賀野完爾(北海道農業試験場)
- ⑮ = 田中征勝(北海道農業試験場)

⑨ **ミスゴケ** 北海道には泥炭地の広く分布するのが特徴である。泥炭は、初期には沼沢にヨシなどの遺体が堆積したものであるが、その生成が進むと、低位泥炭から中間泥炭を経て、ほとんど雨水のみに生育を依存するミスゴケを主とする植物遺体からなる高位泥炭となる。ミスゴケの種類は多く、国内でも50種類におよび、保水性のごく強いのが特徴である。これは、葉緑体をもたない細胞の内部が空洞で、ここに水が入るため、ミスゴケの名もこれに基づく。ミスゴケはこのような保水性を利用し、園芸用な

どに用いられている。

⑩ **サロベツ原野** 天塩川下流に広がるサロベツ原野は、石狩川に次ぐ北海道第二の大湿原で、砂丘の発達により海をどざされ、泥炭植物が長年堆積し、かぶと沼、ペンケ、パンケ沼など多数の湖沼を残して形成されたものである。南北27km、東西8km、面積23,000haといわれる広大な地域には、春から秋まで高山植物、湿性植物が咲きみだれ、とくに6月下旬から7月初旬にかけてのエソカンゾウの満開時が美しい。なお、近傍の徳満台からの利尻山を含めた遠望は雄大である。人間

の開拓を拒み続けたこの原野も、周辺の土地条件のよい部分から酪農地としての開発が進められている。

⑪ **ハマナス** 高さ1~1.5mになる落葉低木で、刺があり、地中枝をひいて繁殖する「北海道の花」として定められており、夏季、赤色大型の花をつける。北海道、本州、その他アジア東北部の温帯、亜寒帯の海に近い地方に広く分布する。海辺の砂浜に群生し、和名は「浜梨」を意味するが、東北地方の人がなまって「ハマナス」と発音したことに由来する。

⑫ **アカエゾマツ** 高さ40m、胸高直径1mにもなる円すい形の美しい高木で、「北海道の木」として定められている。北海道、本州(若手県の一部)、南樺太、南千島に分布する。北海道では、北部、東部の寒冷地方に多く、エゾマツ、トドマツと混交するが、湿原の周辺や岩礫山地に純林をつくることもある。

占めている。これらの主なものは道北や道東の寒冷地域で、水田や一般畑作物には適しないため、草地酪農経営を行っている。このような地域では、一般に1戸当りの経営面積は40~50ha、さく乳牛50~60頭(このほか育成牛10~20頭)におよぶ大型経営を行っている。

⑬ **水稲** 北海道の稲作の歴史は、低温との闘いに明け暮れたと言っても過言ではない。現在栽培されている品種は、短稈、多けつ、感光性、早生であることが特徴で、単位両積当りの牧量は全国でも上位を占めている。水田は、主に比較的気候温暖な道央以南の主として低地帯で、全国の約9%の栽培面積をもってあり、大型経営で1戸当りの平均面積は4haにもおよんでいる。

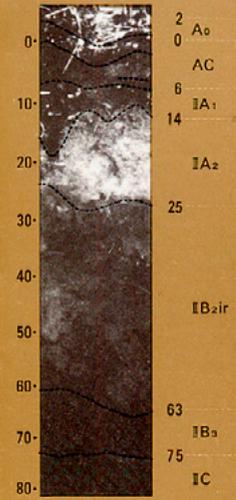
種量ともに全国一である。生産されたタマネギは、9月から翌年の3月にかけて長期貯蔵され、府県に移出されている。主要産地は、往時は札幌市の近郊、伏古川(豊平川の旧流)流域の「札幌タマネギ」が著名であったが、市街化により減少し、現在は富良野や岩見沢周辺、とくに近年面積を拡大してきた北見周辺が主となっている。

河川流域の新しい氾濫堆積物に由来する地味肥沃で物理性もよい褐色低地土での栽培が多く、多肥、集約的な栽培、また、畑作物としては連作に適するものが特徴的である。品種はこれまで「札幌黄」を主体としてきたが、最近は調理加工用として大球のもの、さらに年間を通じて需要に応ずるため、貯蔵性の高い一代雑種なども栽培されてきている。

⑭ **草地酪農** 北海道は牧草地の面積が広く、全国の80%をも

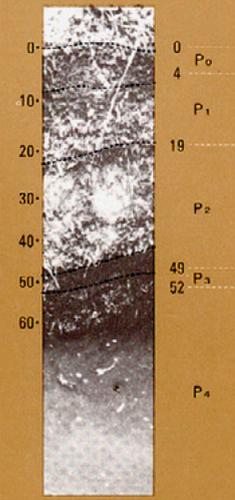
⑮ **タマネギ** 北海道のタマネギは、国内で唯一の春まき秋どりの産地で、全国の生産量の3~4割を占め、作付面積、収

⑦ **ポドソル**



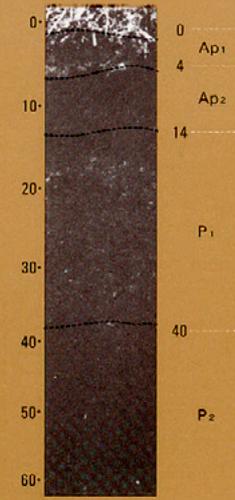
この土壌は、オホーツク海沿岸の浜頓別町から猿払村にかけての砂丘地帯に分布している。他にも高所のものはあるが、面的なひろがりをもって平地に分布するものとしてはわが国で唯一である。これを保存し、学術研究に供するため、北農会は1973年に4ha強の土地を取得している。植生は、アカエゾマツ、クマイザサ、スギゴケ、ツルコケモモ、ヒカゲノカツラなど。一部草地として利用されている。細砂を主体とする砂土で薄いA層の下には漂白層(A₂)と集積層(B)が明瞭に分化している。B層には鉄と若干の腐植が集積し、オルトエルデが舌状に生成している。最表層は、火山灰が薄くおおっている。(斎藤万之助)

⑧ **高位泥炭土**



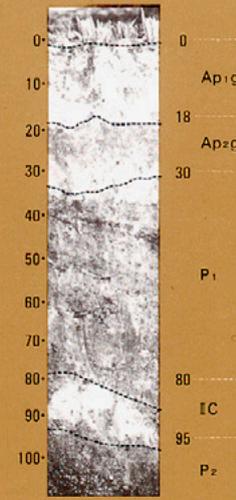
豊富町サロベツ原野に発達した高位泥炭土。高位泥炭地にはミスゴケ堆が発達し、ホロムイスケ、ツルコケモモなどがみられる。地下水位は高い。P₀ 0~4cm ミスゴケの生活層。P₁ 4~19cm ミスゴケ(ホロムイスケを含む)。暗赤褐色、分解不良。P₂ 19~49cm ホロムイスケ・ミスゴケ。暗赤褐色、分解不良。P₃ 49~52cm ワタスゲ。にぶい褐色。分解不良。P₄ 52~80cm ヤマドリゼンマイ。黒色、分解不良。P₄層のヤマドリゼンマイがめずらしい。(斎藤万之助)

⑨ **中間泥炭土**



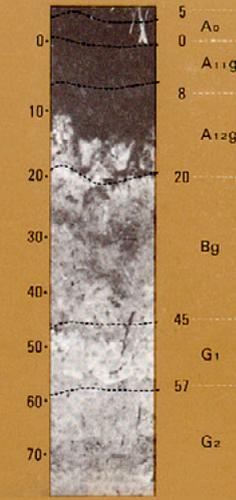
豊富町サロベツ原野。牧業畑。昭和46~48年に草地化され、排水、客土がなされている。Ap₁ 0~4cm 砂壤土質の客土層で、泥炭と混合され黒褐色を呈している。Ap₂ 4~14cm ホロムイスケ主体の黒褐色の泥炭層。ミスゴケを含む。分解良。P₁ 21~40cm ヨシを伴うヌマガヤ泥炭。暗褐色。分解やや不良。P₂ 40cm以下 黒色のヨシ・スゲ泥炭。分解やや不良。作土層の泥炭は分解が進んでいるが、21cm以下は繊維質である。(斎藤万之助)

⑩ **低位泥炭土**



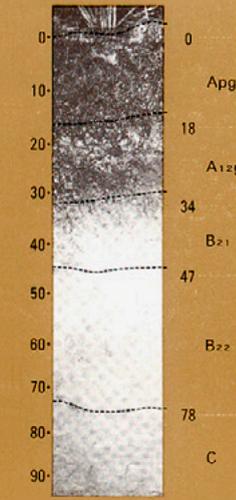
石狩川の中下流域に広く分布する低位泥炭土は、排水とともに客土がなされ、ほとんどが水田として利用されている。断面は岩見沢市西川町の低位泥炭土の水田。過去2~3回の客土によって厚さ30cm程度の無機質層ができてきている。0~18cm 新客土層で腐植を含む軽粘土。18~30cm 旧客土層で腐植にすこぶる富む堆積土。30~80cm 分解の進んだ暗褐色のヨシ泥炭(ハンノキを含む)。80~95cm うすい粘土層。95cm以下 暗褐色のヨシの泥炭層。この泥炭層は分解が進み、現在では安定した状態にあるとみてよい。客土層が厚く、水稲の生産性は他の低地土と変らない。(木村 清)

⑪ **グライ台地土**



疑似グライ土と同様の母材からなり。重粘土の範ちゅうに入る。疑似グライ土の分布する台地の凹地地形など、年間を通じ停滞水型の水分環境のところに生成する。分布はごくわずかである。断面は羽幌町築別高台の中段丘上の未墾地。植生は、クマイザサ、スゲ、ヨシ、ヨモギなど。4.5cm前後から青灰色のグライ層になっている。土性は微砂質粘土~重粘土で、下層ほど粘土が多い。かべ状を呈し、疑似グライ土ほど堅密ではない。亀裂の数は少ないが深さは6.0cm近くまで及んでおり、乾燥化の傾向をうかがわせる。それに沿って腐植が流下している。表層は腐植質であるが、オホーツク海沿岸のものは泥炭質の表層をもつことが多い。(斎藤万之助)

⑫ **褐色低地土**



妹背牛町2区第2。水田。暗色表層褐色低地土、細粒質。石狩川上中流域には、厚い腐植層を有する褐色低地土が分布している。りん酸吸収係数は2000前後、容積重は0.8g/cm³程度と比較的軽いため火山灰の影響があると考えられるが、母材は石狩川の沖積作用によってもたらされたもので、褐色低地土に分類される。断面では圃場整理により腐植層の部分が均平化され3.0cm前後の厚さになっているが、工事前には5.0cm以上に達する例もある。A_{12g}層は圃場整理により圧密され、かべ状を呈しているが、B層は塊状構造が発達し孔隙に富んでいる。(木村 清)

断面の左側の数字は深さ(cm)、右側は層名および層厚(cm)を示す。本文中の火山灰の記号・年代は2p~5pの図を参照。

